

〈第35回学会大会 基調講演〉

レジャー・レクリエーション見聞記

平野 次郎*

My leisure and recreation experiences in European and American countries

Jiro HIRANO*

*学習院女子大学特別専任教授, 元NHK解説委員 *Professor Gakushuin Women's College*

先ほど油井会長のお話で、今回の学会の目玉の一つが地域研究であるということをおうかがいました。

地域研究をなさっておいでになる、あるいはなさった方には、おそらく外を出て向こう側に見える建物がどういう建物であったかについては、もうお調べのことだと思います。あれはかつて中島飛行機という会社の三鷹研究所の設計本部があった建物でございまして、建物の工事が始まったのが、昭和16年の12月8日だったという記録がございます。つまり日本がアメリカに対して宣戦を布告したその日に、何と申しますか、工事が始まったということです。そして、そこで引かれた設計図を元に、陸軍のための飛行機、あるいは、海軍のための航空機がたくさん作られました。その結果は、はかないことになってしまい、その後、いろいろいきさつがあって、国際基督教大学の私どもが通っているところは、教室棟でございました。そんなことが、地域研究の中からでてきたかなあという感じが若干致します。

たまたま、その海軍の話に事が及んだものですから、昭和17年の海軍記念日に、海軍がこういう標語を世間に発表致しました。「月月火水木金金」です。歌にもなりました。つまりそのころの日本人にとって、土曜休む、日曜休むなんていうことは、もってのほかでございまして、日曜日は月曜日のごとく働け。土曜日は金曜日のごとく働けと。つまり働くことだけが、日本人に求められた美徳だったのです。つまりそこには、レジャーのレの字もありませんでしたし、レクリエーションのレの字もなかった。そういう時代に、実は私は生まれているわけなのです。

その後、戦争が終わりまして、日本が平和になりました。その日本が平和になって4年たった1949年、昭和24年に、ワタナベ製菓というお菓子とチューインガムの会社が、「天高く僕肥ゆる」というキャッチコピーを作って発表しました。つまり戦争が終わって4年ぐらいたちますと、やっと人々もゆとりを持ち始めた。あるいは少し体重を増やすことができるほど、食生活が改善しました。それは、おそらくひょっとしたら、第二次世界大戦が終わった後のレジャー

とレクリエーションに関する思想の始まりであったのではないかと思うのです。そのころ私は、学校の授業が終わりますと、貸し自転車屋さんに行って自転車を借りて乗り回したり、あるいは輪回しというのをしたり、あるいは草野球をしたりして、遊びを満喫しておりました。それが、私にとっての、レジャー・レクリエーションの最初のスタイルでございました。

そのころ、それでは、大人になった日本人が、どのようなレジャーあるいはレクリエーションを楽しんでいたかということ、これはあのサザエさんという漫画をお読みになれば分かります。大人の人たちはハイキングとかサイクリングとか、あるいは釣りとか、碁、将棋、麻雀、こういったものを楽しみ、それが彼らにとってのレジャーでありレクリエーションであったのです。これは誰にでも共通する記憶だろうと思います。

そのころ、こういうキャッチコピーが、やはり日本のマスメディアに登場したんです。「我々の生活はこれでよいのだろうか」。これは、ある家庭電化製品を作っているメーカーが発表したキャッチコピーだったのですが、我々の生活はこれでいいのだろうか。働いてばかりいて、これでいいのだろうか。人間というのは、もっと楽しみを求めなくていいのだろうかという、こういう疑問が出されたのが1951年だったのです。

そのころ私はもう中学生になっておりましたが、何をやっていたか今から思い起こしますと、やはりハイキングであったり、サイクリングであったり、あるいは街を歩きまわることであったりする事でした。そして私の場合は、クラリネットを吹くことが好きでしたから、クラリネットを吹くこと。そういうものが、私にとってのレクリエーションであり、またレジャーであったような気が致します。

そうこうしているうちに、私も大学に入ったのですが、大学2年生の時のコマースのキャッチコピーに2つ有名なのがございます。「人間らしくやりたい」というのと、「トリスを飲んでハワイへ行こう」という、両方ともトリスウイスキーが出したキャッチコピーで、書いたのは、これはおそらく開高健さんではなかったか

と思います。

「人間らしくやりたい」やっぱりこういう欲求が、衣食が足りてくる中で、日本人の心の中に芽生えて来たんです。ですから、こういうキャッチコピーが人々の心を打ったのだらうと思います。それから「トリスを飲んでハワイへ行こう」というのは、日本人が第二次世界大戦後初めて外国に行くということを考えた。現実のこととして考えた。それが1961年だったのです。

そのころ私はこの大学におりまして、当時も今もそうだと思いますけれども、この大学というのは、日本の中のアメリカなんです。日本の中にアメリカがあった。こんな素晴らしい環境があった。こんな素晴らしい生活があった。こんな自由な雰囲気があったということで、日本人の豊かな生活を若干先取りするような形で、この大学で4年間の学生生活を送りました。

今日ここへ改めてやって参りまして、一番強く感じたのは、やはり自然が素晴らしいということです。レジャー・レクリエーション的に申し上げれば、森林浴というものの素晴らしさを、私は今から40数年前にここで味わったのではないだろうかと思うんです。今はどうか分かりませんが、私どものころは、4年でこの大学を卒業するのももったいないという雰囲気がずいぶん強く残っておりまして、5年いる6年いる7年いる、あるいは8年まで、何ていうのがずいぶんいたんです。これはある意味では、この素晴らしい自然環境の中から放り出されて、また、ゴミゴミした都会の中に戻って行くのが嫌だという、そういう気持ちだったのだと思います。やはり人間というのは、素晴らしいもの、いいものに触れると、そこに長い間自分の身を浸していたいという、そういう心理が働く。それがそのころの私どもではなかったかというように思います。

私は実は1963年の3月にこの大学を卒業してはいるんですが、卒業式には出ていないんです。といいますのは、その前に、奨学金をもらってアメリカへ行きました。ある企業が、奨学金を出してくれることになりまして、それでアメリカのコーネル大学というところへ行きました。そこで私はレジャー・レクリエーション的に申

し上げますと、次のショックを受けるわけです。

いろんな意味でのショックなのですが、ご存知のように、アメリカの大学、とりわけ大学院の生活は、下宿と教室と食堂と図書館の4カ所しか大体足を運ばないんです。本をとにかく読まなければいけない。そうするとどうしても疲れてくるわけです。その疲れを、精神の疲れをどうやってほぐすかということで、いろいろ考えた結果、私は男子学生だけのために設けられている屋内プールに泳ぎに行くことにしたんです。友達に誘われたのが動機だったんですが、その屋内プールにはプールの他にサウナがありまして、プールで泳いだ後、サウナの部屋に入って、それで汗を全部流して、そして下宿に帰る。そういう生活を冬の間もずっとやっておりました。ただ問題は、今はどうか分かりませんが、アメリカの大学に留学をなさった方ならばお分かりだと思のですが、そのころの男子の学生たちのプールというのは、身にものをまもって泳いではいけないと、こういう決まりがあったのです。海水パンツは、あれは、ばい菌の巣であるということ、誰かが言ったんでしょう。ですから泳ぐ時には、それこそ生まれたままの姿で泳がなければいけない。男の子ばかりだからよかったんですが、それでも飛び込みをやったり、背泳ぎをしたりしているのを見ますと、何となく変な気持ちになりました。そのうち私はまた、つてを頼って女子学生だけのプールに泳ぎに行くことになりました。これは女子学生からの招待があれば泳ぎに行っていたわけですが、しかしながら、それは水着を持参で行かなければいけない。そういう生活を自分のレジャーならびにレクリエーションとして実行しておりました。そしてもう一つ行っていたのが、冬の間ですが、スケートリンクに行って滑ることでした。これらが学生時代の私の3つの楽しみでございました。

実はその最初のアメリカ滞在の時に、びっくりしたことがございます。夏休みにオハイオ州のデイトンというところにあります工場でアルバイトをしていたのです。ある時、同じセクションにいるアップさんという「UPP」という面白いスペルの人が私に、おまえ5時になったら

俺に付き合えというんです。何かと思いましたが、アップさんがセスナ機を1機持っていたんです。デイトンというところはライトパターソンの博物館があるところで、ライト兄弟がでたところなんです。アップさんは格納庫から自分のセスナ機を出してきたのですが、そのセスナ機には絆創膏が貼ってあるんです。いろんなところに穴が開いているんだそうですが、それくらいオンボロなセスナ機なんです。それに乗れと言うんです。乗りましたら、彼が操縦して空に舞い上がると、街の上空をずっと旋回してくれました。おまえの下宿はあそことか、工場はこことか、あれが社長の家だとか、いろんなことを説明してくれて、まあ30分くらいの飛行を楽しみました。私はそれが飛行機に乗った2回目でございます。1回目というのは、日本からアメリカに行った時です。2回目がそのセスナ機で、セスナ機に乗ったのは、はじめてでした。この時、アメリカ人というのはすごいことをやるなあと思いました。一介の社員がセスナ機を自家用に持って、それを適宜に楽しむなんて、これはすごい国だなあと思いました。アメリカがすごい国だなあと思ったのは、実はもう一回ございました。それはNHKに入って特派員としてワシントンに勤務をした時のことでございますが、その話はもう少し後でさせていただきますと思います。

その後私は日本に帰って一時期東京オリンピックの組織委員会で働いた後、NHKに入りました。NHKという企業は、組織は、きわめて日本的な組織であると同時に、きわめて人使いの荒い組織でもありました。ニュースというのは、いつどこで何が起るか分からない。したがって常に待機なんです。常に待機ということは、上司あるいは組織からお呼びが掛かったらすぐ駆けつけられる所にいなければいけないんです。良しとされたレジャーあるいは良しとされたレクリエーションがありました。それは何かというと、麻雀ですとか、花札ですとか、囲碁、将棋。なぜそういうそのものが良しとされたかといいますと、麻雀ならば4人、花札、囲碁、将棋ならば2人でやらなければいけないわけですから、2人固めてお呼びをかける、捕まえることがで

きる。そういう構造上の理由があったんです。ですからそれ以外のレジャー、レクリエーションというのは、御法度でございまして、中でもゴルフとマイカーとボーリングは、三悪というふうに私どもは教えられました。逆に言いますと、それは1960年代の半ばから70年代ころにかけてなんです。日本人もかなり裕福になりはじめて、ゴルフ、あるいはボーリング、マイカーといったものが普及し始めたころだったんですが、そういうものに興味を持つことは正義の味方であるべくジャーナリストはしてはいけない、というふうに言われました。その代わりなのでしょう、会社が、組織が用意するレクリエーションというのが年に2回ございました。

これを、私どもは、半舷と呼んだり全舷と呼んだりしたんです。半舷というのは、勤務をしている人間の半数がレクリエーションに行く。残りの半分が留守を守る。全舷は、くじ運の悪い一人か二人が残って、あと全員がレクリエーションに出掛けるのです。そのレクリエーションの典型的なスタイルというのは、大体まず温泉宿に行き、大宴会をやりまして、その後また例によって麻雀・花札・碁・囲碁・将棋に分かれるか、あるいは、せいぜい釣りグループというのを作って釣りに行くといった程度でしたので、実は結果としてレクリエーションにはならなかったんです。私はこのICUにいた時に三隅先生にレクリエーションがレックエーションにならないように、レック(wreck)はぶちこわすという意味なんです。レックエーションにならないようにというふうに、ずいぶん教えられたんですが、NHKが組織として用意したレクリエーションはまさにレックエーションでございました。大体が二日酔いになったり、何かして帰ってくるような、でもそれでも楽しみでございました。

そのころ、日本の社会というのは、ひた走りに高度経済成長路線を走っていたわけなんです。そのころのコマーシャルメッセージを一つご紹介したいと思うのですが、「モーレッツからビューティフルへ」。その前に「オーモーレッツ」がありました。小川ローザさんがでてきたマルゼン石油のコマーシャル。その後、「モーレッツから

ビューティフルへ」キャッチコピーを採用したのがフジゼロックス、小林陽太郎さんの会社です。このフジゼロックスというのは、ゼロックスというアメリカの企業が日本のフジフィルムと一緒に作って作った合弁会社でありまして、その経営理念の中にやはりアメリカ的な価値観を持ち込んだ事から、「モーレッツからビューティフル」とビューティフルという言葉を表に出したわけです。

その後、私は、4年ほど政治記者をやって、それからワシントンに特派員として勤務をしました。政治記者の時のレクリエーションというのは、これはあってなきがごとしでして、政治記者というのは、政治家から情報を取らなければいけない。ですから政治家がレクリエーションとしていることを自分のレクリエーションとするという、あまりよろしくない発想の元に行動するんです。そうしますと爺様の政治家たちは盆栽が趣味だったりするものですから、若い記者が盆栽をやってみたりするのです。ある政治家が薔薇をやりますと、薔薇を自分もやってみたりという具合です。それはあまりレクリエーションというようなものではなかったんですが、4年で切り上げさせていただきまして、ワシントンに特派員として赴任を致しました。

その時のショックが実は二つあったんです。一つは、先ほどちょっと申し上げたアメリカというのはすごい国ということをおぼされたショックなんです。それは週末にみんなが芝刈りをするということです。私も到底日本に帰ったら、こういう生活はできないだろうと思いました。敷地が300坪くらいで、そこに地下1階地上2階の、赤レンガ作りの家を本当に安い家賃で借りたんです。契約書に条件がありまして、庭の芝はきちっと刈ることというのがあります。ですから毎週土曜日になりますと、芝刈りをやらなければいけなかったんです。これは大変な重労働で、身体をほぐすという意味では、レクリエーションにはなったんでしょうけれども、レジャーとは程遠い作業でございました。アメリカ中の一戸建ての家に住んでいる人たちが、それをやっているわけですから、それをやりながら日本と戦って、勝ったという事はやはりすご

いというか、あるいはそれをやるだけの体力を持った国と、なぜ日本は戦ってしまったんだろうなんていう、そんなこともそのころ考えました。

もう一つ、私がそこで開眼したことは、DIY Do it yourselfの考え方なんです。アメリカ人は、たぶん自分たち、あるいは自分たちの先祖が開拓者としてアメリカにやってきたからなのでしょうが、自分で自分のことを始末をつけるということが大好きなんです。Do it yourself のための、お店がいっぱいありまして、そこでいろんな物を買ってきては、いろんな物を作る。ある人は、自分の家を1件建てたんです。これは壮観です。アメリカの家というのはご存じのようにツーバイフォーの規格住宅ですから、まあ部品を買ってきてそれを手順どおり組み立てていけばいいんですが、基礎作りから始めて、そこに柱を、あるいは、枠組み壁工法なんです。柱と柱を建てて、そこに壁を入れ込んで、屋根をふくところまで全部、自分とその仲間で作った男というのがおりました。私はそういうことに興味があったものですから、しょっちゅう見に行きましたら、完成の時のパーティーに呼んでくれまして、本当にアメリカ人というのはすごいなあ、と思いました。私もその後帰ってきて、自分で小さな家を建てることになった時に、それをやりたいと言ったら、日本は建築基準法その他があって、素人は建てちゃいけないだと言われまして、がっかり引き下がったことがございます。それが一つ、私がワシントンの取材時代に、受けた大きなショックでございます。

もう一つは、私のバックヤードネーバーといいますが、裏庭がつながっている家のご主人の趣味だったんです。彼は、もともとは建築家でタイルの設計をしております。タイルの設計というのは、アメリカでは大変重要な仕事なんです。なぜかと言いますと、アメリカ人はお風呂に入るよりもシャワーを浴びる頻度が高いわけです。そうするとシャワー室の床はタイルになっていまして、それがその石鹸の泡か何かで滑ったりして、よく骨を折ったり怪我をしたりするんです。ですから滑らないタイルをいかにして

開発するかというのが、アメリカのタイル業界にとっては大変な命題だったんです。彼は実用新案ですか、特許を取りまして、それである程度左うちわな生活を送っていたんです。その彼の趣味というのが、自動車のリメイクだったんです。時々どっかへ行って壊れた、まあ大体がポルシェとかジャガーとかアメリカ人にとっても外車なんですけど、オンボロになった車を買ってくるんです。それを解体してしまうんです。解体して悪い部品は全部取り替えて、もう一回また全部組立直しまして、最後は塗装までして、それで新車にして売り払うんです。そうしますと、買った時の費用と、リメイクの工事に掛った費用、全部を足しても、なお、おつりがくるくらいの高い値段で売れるんです。彼にとってはそれが大変な趣味であり、実益であったわけです。私はこういう趣味というのもあるんだなあと思いました。

これも私はやりたいと思ひまして、日本に戻った後、NHKからどういう研修を受けたいですかと言われたものですから、私は自動車の修理という項目を書いて出したらダメですと言われました。NHKには車両部というのがありまして、車両部には車の運転をする人たちがいるんですけど、車両部の人しか受ける資格はありませんと。

しかし、アメリカ人はそういう人たちがいっぱいいるんです。第一期のブッシュ政権で国防長官をやっていたコーリン・パウエルさん。この人がまさにその趣味の持ち主。あの人は、古い車を買ってきて解体して全部直してチューンナップして新車同様に売るといふ。そういう趣味を持っています。それから東京のアメリカ大使館で広報官として働いて、そのうちレーガン政権の時にカールッチ国防長官の報道官になったダン・ハワードという男がいるんです。この人は日本でそれをやっていました。彼の家、アメリカ大使館員のコンパウンドの中にあるんですけど、そこへ行くと彼が休みの日には、ようするにナッパ服を着てそれをやっている。そういう趣味を持てるのは大変うらやましいなあということを私は感じました。

そのころ私は、1977年に日本へ戻ってきたんですが、日本の高度経済成長っていうのは更に

進んでおりまして、キャッチフレーズで申し上げますと、もっと素晴らしいっていうんですか、もっと大掛かりなものが出現しておりました。例えば一つは、「トースト娘が上がる」というキャッチフレーズです。ご記憶でしょうか。これ全日空なんです。全日空が若い女性たちをターゲットにしまして、グアムとかサイパンとか、あるいはタイのプーケット島とか、もうハワイなんかもっと超えるようなゴージャスな旅を売り出しました。そのキャッチフレーズとして、キャッチコピーとして「トースト娘が上がる」。モデルになったのは前田美波里さんでしたが、そういう時代がありました。つまり日本の若い人たち、とりわけ若い女性たちが自由になるお金を持つようになった。そして自由になる時間も持つようになった。そして自由な精神も持つようになった。まあ、この辺りで、本格的なレジャー時代が到来したのではないかなあというふうに私は見ているんです。ちょっと私、今日調べてこなかったんですが、レジャー白書というような公文書がでたのも、おそらくはこの頃だったのではないかというふうに思っています。

その後、私はしばらく東京で勤務をして、ジュネーブへ行ったんです。そのころの、日本のコマースのキャッチコピーで流行ったのは、「亭主元気で留守がいい」なんです。これは、どういうことかという、やっぱり日本のサラリーマンは一生懸命働くのがいいんだと。そんなレジャーだのレクリエーションだの軟弱なことを言っている人間はダメなんだ、という意味が若干込められていたような気がするんです。ともかく亭主というのは、元気で留守であって、給料だけ運んで来てくれればいいんだと。まあ、こういう先ほど私が申し上げた「トースト娘が上がる」とか、レジャーとかレクリエーションとかという、それとは、また、逆行するような世の中になったと言いますか、日本人は真面目なもんですから、なかなかレジャー、レクリエーションの方に全力を投入するまでに踏み切れなかったという、そういう精神構造がこの辺にでているような気がするんです。

私自身にとっても、全くそのとおりでござい

まして、「亭主元気で留守がいい」というんで、ジュネーブへ単身赴任させられまして、しばらくは悲哀を味わったんですが、そのうち家族が合流しまして、楽しみました。これが私がヨーロッパに住んだ初めてでございます。住んだ場所が山国、スイスのジュネーブですから、ちょっと特殊かもしれませんが、それでも私は時差を利用して、さんざんレジャーとレクリエーションに精を出しました。時差といいますと冬の時間になりますと、あそこは8時間東京と時差がありますから、正午は東京の午後8時なんです。7時のニュースが終わりますとご存じのように、今は10時のニュースがありますが、あのころは、翌朝の7時までニュース無かったんです。ですから夜の7時のニュースに入るようなニュースは入れてしまうけど、それが終わったら翌朝までといたしますか、半日解放されるわけです。ですから私は、昼まで仕事をしまして、それからあらかじめ車に積んでおいたスキーをそのまま持って、山に行つて半日券というのを買って滑りまくりました。これも取材の内だというふうにならざるを得ないんですが、そのころの私どもの仲間は、昼はスキー、夜はウイスキーという生活をしておりまして、それが健康にも精神にも、肉体にも精神にももっとも良いんだというふうにならざるを得ない。それがジュネーブ時代の最大のレクリエーションでありましたし、私にとってはレジャーでもありました。ここで一つ分かることは、やっぱりヨーロッパの人たちは、アメリカの人たちとはちょっと違ったレジャーの持ち方、あるいはレクリエーションの持ち方をしているなあということなんです。

私が行ったスイスは東隣がドイツですからドイツから人がたくさん来てまして、ドイツ人は、団体行動をするのが大好きです。スイスの山の中に温泉地があり、ロッカバンドという温泉地の街があり、そこへ行きますと昼はスキー、夜は温泉なんです。その温泉も、いわゆるリハビリ系の温泉です。日本人のように、温泉にゆっくり浸かって「いい湯だな」など言っているんじゃないで、温泉の中で体操をする。それも集団で体操をするという、そういうことをドイツの人たちは好んでやっておりました。これはや

はりドイツ人は組織力が優れているし、組織として行動するのが好きなんだなあということをおもわれました。

それからもう一つそこで思ったのは、ヨーロッパの人たちにとってレジャー、あるいはレクリエーションというのは、体力増強のためのものなんだな、そういう目的がやっぱりあるんだろうなというふうには思ったんです。アメリカの人たちのレジャーというのは、あるいはレクリエーションというのは、体力増強というその目的があまり表面には見えてこないんです。とにかく自分の楽しみということが表面にでてくるんですが、ヨーロッパの場合は何かをすることによって目的としていたものを手にするという考え方が基本にあるんだろうなというふうには思いました。これがまあ、アメリカ人の考え方とヨーロッパ人の考え方とかなり違うかなと思いました。

そこに私は3年ほどおりまして、そして帰ってきたんですが、その時に日本で目にした、またコマーシャルですが「食う寝る遊ぶ」というのがございました。これは1988年に日産セフィーロが出した車のコマーシャルです。「食う寝る遊ぶ」、つまりそのころの日本人にとっての楽しみは何かというと、食べることと、寝ること、それから遊ぶということだったんです。で、この中で寝るというのがやっぱり一つ見落としてはいけないことだと思うんです。なぜ寝るか。それは疲れはてたからなんです。やはり日本人は一生懸命働いて疲れ果てて、やっぱり眠ること、寝ることが大変なレクリエーションであったということだろうというふうには思いました。

実はそのころから私は、テレビの画面にでるような仕事を始めたもんですから、人目を避けなければいけない、そういう境遇になりました。ある時なんか、知らない人から手紙が来まして、あなたがレストランで奥さんや子供さんたちと食べているのを見ましたというのです。それから夫婦ゲンカをしているのを聞きましたとか余計なことをおっしゃる方がいっぱいいるもんですから、ひたすら私は、人目を避ける生活をしておりました。そのころ私が、主に、レジャー、あるいはレクリエーションとして何をしたかという、人里離れた山の中に隠れて、ひたすら

自分で調理をして家族に食べさせるという、そういう生活をしておりました。そのころから私は、料理が自分のレジャーになりましたし、自分のレクリエーションにもなりました。

その後、私はロンドンにまた行くんですが、ロンドンに行く直前に日本で流行ったキャッチコピーが、「24時間戦えますか」というものだったんです。これは三共製菓のコマーシャルでございまして、ちょうどこれバブルが弾ける直前なんです。ここへ来てもまだやっぱり日本人は働き中毒だったんです。「24時間戦えますか」。そんなことやっているもんだから、バブルが弾けてしまったんです。

バブルが弾けたころに私はロンドンに行きまして、ロンドンで足かけ2年生活を致しました。あそこは都会で、そして綺麗な街でございまして、そして今のようにテロ事件なんかの心配がなかったものですから、ずいぶん文化的な生活を楽しましました。そこでの楽しみ方は、人間としてある役割を演じるという、そういう楽しみ方なんです。ミュージカルといいますと、皆さんニューヨークのブロードウェイだとおっしゃるかもしれませんが、もともとのミュージカルというのは、ロンドンが発祥の地なんです。ロンドンのミュージカルはどちらかというと、ストーリーが中心、ニューヨークのミュージカルはどちらかというと、踊りが中心のものなんです。いずれにしても、ロンドンのミュージカルが栄えている理由というのは、人間がある役を人生の中で演ずる。そういうことをイギリスの人たちが好んでいるからだというふうに私は思うんです。それは日常の生活にも表われていまして、ロンドンでの最大の楽しみというのは、やっぱり自分がこの社会でどういう役割を演じるかということなのです。それを上手く演じることができるかできないか、それを私はロンドンで楽しましました。

具体的に申し上げますと、9時から5時までは事務所で働くんですが、それが終わりますとね、ひげを剃って、それからロッカーから新しいバリッと糊の利いたシャツを出して、ある時は、ブラックタイに着替えて、それで音楽やオペラを聴きに行くとか、あるいは観劇やパーティー

に行くとか、そういう生活をやるんです。これも私にとっては短い期間でしたが、大変楽しい記憶として残っております。

1990年というのは私がまだまだロンドンにいたころなんですが、そのころ日本で流行ったコマーシャルに、「日本を休もう」というのがあったはずですが。これはJRが観光客を増やすために作ったコマーシャルなんです。それは、ディスカバージャパンになったり、あるいは今のアンビシャスジャパンになったりしているんですが、何とか日本人にもう少しゆとりを持って旅行していただきたい、観光を楽しんでいただきたい、そういう考え方から作られたキャッチコピーだと思うんです。これには日本の国民の高齢化がかなり顕著に進んできたということが背景としてあったと思うんです。つまり、働き蜂たちが、羽を休めて、そして別の世界に入っていく。高齢化の入り口が、ちょうどこの辺と一致したんだろうというふうに思うんです。それを企業は先取りしてこういうキャッチフレーズを作ったんだろうと思うんです。

その後私は、ロンドンから戻ってきて解説員という仕事をしました。解説員というのは基本的には個人商店なんです。それぞれが専門の領域を持っていて店開きしている。そして、自分のお店で、そこを窓口にして仕事をするんですが、それぞれのお店によって、営業時間も違えば、営業内容も違うわけですから、かつてのように全員結束して休みを取って温泉へ行くとか、ゴルフへ行くとか、釣りに行くとか、そういうようなことがもう事実上不可能になりました。自分で自分の楽しみを見出さなければいけないということになりまして、私もそれなりに自分で自分の楽しみを作り出して、自分の余暇を過ごすようになったんです。その時に自分が何をやったか、あるいは今何をやっているかということ、つらつら考えてみますと、それぞれの自分の人生のステージで手に入れた楽しみ、あるいはその辺りでちょっと知識として仕入れた楽しみを、敷衍（ふえん）して、それを今の自分の楽しみにしているような、そういう感じがするんです。

私は何でも物が分かんなくなるとOED、オッ

クスフォード英語辞書に頼るんです。この間、OEDを調べていましたら、leisureとrecreationについて、それぞれの語源が載っていたんです。私は知りませんでした。おもしろいことに、レクリエーションというのは、もともと、物を食べるという意味だったというんです。本当かどうか分かりません。物を食べるのがレクリエーションだったというのは、ちょっと短絡的かもしれませんが、1390年にレクリエーションという単語が、英語の文献の中に姿を見せたそうです。これがレクリエーションという言葉がでてきた一番古いんだそうですが、それを読むと、レクリエーションの定義は、refreshment by partaking a food, nourishment. つまり、食べ物あるいは栄養のある物を摂取することによって発生するというか手に入れることができるリフレッシュメント、ですから、新しい気持ちとかいうか、そういう意味なんです。つまりレクリエーションが食べるということと関係があるということになれば、日本人が春に桜の花の下にゴザを敷いてそこで物を食べたり、あるいは月夜を見ながら団子を食べたり、あるいは温泉に行って宴会をやったりするっていうのは、これはまさにレクリエーションの原型に近いわけです。日本人はそういう意味では、生まれながらにしてレクリエーション民族であったということが言えなくもないのではないかなあと思うんです。

ところがそのレクリエーションという単語の使われ方も、だんだん変わってきまして、身体的な感覚を高めることという意味合いがでてくるんです。つまり、最初はその空きっ腹を満たすのがレクリエーションだったんだけど、そのうちに衣食足りて礼節を知るんでしょうか、身体的な快楽を得ることがレクリエーションであるということになる。その一時期ですけど、性的な意味が含まれていたらしいんです。そういう時期があって、その後、comfort or consolation of the mind, 要するに心の満足、それから心の充足、それがレクリエーションの意味になる。つまり最初は、物を食べることがレクリエーションであったものが、その次は身体的な快楽になって、それから最終的には精神的な快

楽になったという言葉の進化が分かったんです。それからしますと、私は日本人は先天的にレクリエーション民族だということは言ったのですが、しかし、本当に第2段階の肉体的な快楽、それから第3段階の精神的な快楽までを含めてレクリエーションを満喫している民族かというところ、必ずしもそうじゃないんじゃないかと思うんです。まだ第1段階からかなりでられないところにいるんじゃないかなと気が致します。何となく面白いんです。

それからもう一つレジャーについても調べました。leisureという単語の方がrecreationという単語よりも、英語の単語としては古いんだそうです。最初にでてきたのは、1303年というふうに書いてありました。これはどういう意味で使われたかということ、freedom or opportunity to do something specified or implied. などで。自由という概念が基本になっているんです。自由あるいはそういう機会、何か自分がしたいことをする、そういう自由。あるいは何か自分がしたいことができる。そういう余裕。それがレジャーだと。

そうしますと、日本の場合レジャーという言葉が日常化するの、かなり後になった1960年代か70年代ぐらいだと思うんですが、そのぐらいになった理由も分らないわけではないんです。日本人はやっぱりあくせく働くことが第一であって自分が好きなことをしたい、する自由とか、自分が好きなことをする時間というのを、なかなか手に入れることができなかった。そういう時期が第二次世界大戦後長かったものですから、あるいは第二次世界大戦前は、大正デモクラシーの一時期を除いては、ほぼ明治以降はなかったでしょうから、レジャーというのはレクリエーションに比べて概念が遅くできて日本人にまだそんなに理解されていないというのが何となく分かるような気も致します。

ただ、そんなことを考えなかった環境の中で、かれこれ60数年を送ってきたわけですが、今になって考えてみると、やっぱりその時代時代によって、それぞれの人間にとってレクリエーションが意味するものも違うし、あるいはレジャーが意味するものも違う。俗に「歌は世につれ、

世は歌につれ」というふうに申しますけれども、それと同じように、レクリエーションもレジャーも、世につれる部分というのがずいぶん大きいんじゃないかなあという気がしてなりません。それが一つなんです。

それからもう一つは、レジャーもレクリエーションも、世につれる部分と同時に、その人、人それぞれにつれる部分というのが、やっぱり大きいんじゃないかと思うんです。今の私が自動車修理工のように、自動車の下に潜って油まみれになって、部品を外したり取り替えたりすることができるかっていうと、それはたぶんもう肉体的に不可能だろうと思います。すぐ腰が痛くなってしまったり、あるいは部品を、取り扱い説明書を読もうと思って、一番最初に探すのが眼鏡であったり、その眼鏡がでてこなかったりというようなことがごく当たり前のようになって参りましたから。そうするとその人の、人生の段階において、その人間がレジャーと考えるもの、あるいはその人間がレクリエーションと考えるものがやっぱり違っているのが当然だし、違わなければいけないだろうなあというふうに、私は思うようになりました。ですからそういう意味で言いますと、今から50年前のレジャーの主流が何であったか、今から30年前のレジャーの主流が何であったか、それから今の時代のレジャーの主流が何であるかっていうことを比較して見るのも、世の中のその移り変わりを読むうえで、大変、有意義なことかなあというような感じがしないわけでもありません。

そして、恥ずかしながら自分が今何に楽しみあるいは余暇を見出しているかという、一つは、先ほどちょっと申し上げたように料理なんです。やっぱり、食う寝る遊ぶの「食う」がやっぱり一番最初に来るんでしょう。ですから私は、「あなたのレジャーは何ですか」と言ったら、「それは料理です。」と。「あなたはレクリエーションを何によって、あなた自身の精神ならびに肉体の疲労回復です、作り出していますか。」と言われたら、私は、迷うことなく「皿洗いです。」「じゃがいの皮むきです。」というふうに申し上げます。それが私にとって、レジャーでもあり実はレクリエーションでもあるんです。

で、その次は何かというと、やっぱりこのサザエさんの漫画の世界に戻ってしまうんです。釣りとか花見とかってところに行きませんが、やっぱり囲碁、将棋が昔に比べて面白くなってきた。それは、身体を動かさなくてすむといえますか、身体をほんのちょっとだけ動かせばいいんで、後は頭を動かせばいいわけで、年は取っても、頭を動かすことにはそんなに苦痛は感じない。ただ身体を動かすことには苦痛を感じるわけですから、そういうそのレジャーあるいはレクリエーションというのは、やはり今の私にとっては、ひょっとしたら最適なレジャーでありレクリエーションであるかもしれないというふうに思うんです。ようするにTPOの考え方で。これを持てば、それでいいだろうなあというふうに思うんです。

ただ、こういうふうに申し上げて来ても、ただ一つだけ私が決定的に、大体60年と申しませんが50年くらいの自分の人生の中で確実に変わったものがあるんです。それは、やっぱりものの考え方なんでしょう。子供のころ、それから大学に入る直前ぐらいまでは、やはり贅沢は敵だという考え方が自分の精神の中にあっような気がするんです。贅沢は敵だけれども、ご存じのように「月月火水木金金」と同じころに、当時の日本政府が打ちだしたスローガンです。それに、「贅沢は敵だ」というポスターがありますと、その、「敵」の上に、こうちょっとカギを入れて素を書きまして、「贅沢は素敵だ」というふうにして、それで鬱憤を晴らした日本人がいたようですが、「贅沢は敵だ」とか、あるいは「パーマメントはやめましょう」とか、きわめて真面目と言いますか、ある意味ではストイックなかもしれませんが、そういう精神構造だった自分が、今はそうではなくて、やっぱり人間というのは、精神の自由、肉体の自由を確保する必要があるし、精神の自由、肉体の自由を増進するためには一体何をしなければいけないか。そういうものがマイナスのものじゃなくて、そういうものが人間にとって必要不可欠なプラスのものであるという、そういう考え方に変わっているということに気がつくんです。

ただその間に何回か行ったり来たりがありま

して、「24時間働けますか」。24時間働かなければいけないあと考えた時もあったし、そうでなくて「日本を休もう」と考えた時もありました。いろいろなブレはあったんですが、そういうブレを経て、そして今の日本に到達した。そしてその原点が一体どこにあるのかなあとというと、ひょっとすると三隅先生、高橋先生、高橋和敏先生に私は教わったんです。それから私はさっきまでトマト先生ってあだ名しか思い出せなかったんですが、野沢先生とか、ICUでレクリエーション、学問としてではなくて、というか学問として私は全く解らなかったから、実技を通してなんでしょうけれども、教えて下さった先生方に、お礼を申し上げなければいけないんじゃないかなというふうに思っております。そういう意味では、たまたまだったのか運命的だったのか分かりませんが、この学校で4年間を送ることができたことが、今日の自分につながったというふうに強く認識をさせられております。

若干私早口で話をしてしまいましたものから、ここに用意してきた項目をほとんど全部話をしてしまいました。一番最後に、私はこういうことを書いたんです。なぜか、誰か六歌仙か誰かの歌の狂歌の文句なんです。「目はかすみ、足はよろめき、手は震え、耳聞こえねど死にたくはなし」と書いてあります。これは、私のもうずっと前に亡くなった祖父がよく口にしていた言葉なんです。「目はかすみ、足はよろめき、手は震え、耳聞こえねど死にたくはなし」。これはやはり、レジャーとレクリエーションというものが無かったら、もう死んでもいいやというふうに多分思うんでしょう。でも、レジャーとレクリエーションが人間の支えになって、仮

に目はかすんで、これを出さなきゃ物が見えなくなったり、あるいは足がよろめいたり手が震えたりして、こうやって何回聞いても分かんなくなったりしても、それでもやっぱり人間というのは生きてる限り楽しみがある。生きているだけでいい。自分の精神と肉体をリフレッシュして、そして更にそれを豊かなものにする。そういうその機会があるんだし、そういう努力をすれば、その努力が報われるんだということを、教えてくれるのがレジャー学であり、レクリエーション学ではないだろうかと思っているんです。

そういう意味で私は、今日ここにお招きを受けて皆様方に若干半分以上漫談でございましたが、こういう話をさせていただく機会が持てたことを大変嬉しく思っています。ただ皆様方からすれば、あんな漫談をするような人間はもう一回だけでいいから、後数十年は呼ばないでおこうっていうことになるかもしれません。若干参考になりましたら、私も大変嬉しく思います。私は視聴率の世界でずうっと生きて来たもんですから、こういうところに来て何が怖いかっていうと、こっくりこっくりなさる方が出て下さると困るんです。そういう方が出ますと、私はいつもこういうふうに言うんです。「私は人材育成の話が得意なんです。今日も人材育成しました。」それは、私の話つまらない、だからお客さまがこっくりこっくりする。と、寝る子は育って人材が育成されるってことなんです。今日は、そういう意味での人材育成には、全く貢献できなかったのではないかというふうに思っています。どうも我慢比べのようになって申し訳ございませんでした。ありがとうございました。(文責 西野 仁)